四阪島（上）

公害とその克服の人間記録

木本正次

講談社

四阪島（上）
公害とその克服の人間記録
昭和四十六年十二月二十日　第一刷発行

著　者　木本正次
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京(〇三)九五―一二一一(大代表)
振替　東京三九三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　大製株式会社
定価　五四〇円
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© 木本正次　昭和四十六年

Printed in Japan

0093-300676-2253 (0)　(文2)

四　阪　島（上）

公害とその克服の人間記録

目次

内外の危機……七
歴史を継ぐもの……三三
煙害の実態……四四
別子の光と陰……四四
巨人の落日……七七
或る技師の来歴……九五
足尾の風……一一七
摸索と焦躁……一三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人境俱不奪……一四四
溶鉱炉をつぶせ……一六三
待ちかねた男……一八三
『島』への決意……一九六
悲劇の中で……二二五
哲人去る……二三四
建設への曲折……二四三
『直訴』の衝撃……二六三
つかの間の平和……二八三

本篇の主な登場人物

大歳克衛画

佐藤友純
広瀬宰平
伊藤貞則

西園寺公望

鈴木馬左也

装幀　大歳克衛

内外の危機

明治二十七年一月下旬の、かなり冷え込みのきびしい、外には雪がうっすらと刷かれている或る早い午後であった。

大阪・川口の開港場の一角――北区富島町一二三番屋敷にある住友本店の重任局で、二人の男が向かい合った机についていた。重任局というのは現在の言葉でいえば職制上の重役会のことでもあり、またその部屋のことでもある。

「全くこの重大なご時勢に、なんということでしょうねえ――」

年若い一人が、丁寧な言葉で話しかけた。理事の豊島住作であった。いましがた何処かから帰って来て、しばらくは自分の椅子にかけて、腕を組んだ考え深げな姿勢で目を閉じていたのだが、耐えかねたように目を開いて、さも不安げに身体をのり出して語り始めたのである。

「新居浜の百姓たちがあまり騒ぐので、とうとう地元の政治家たちが乗り出して、西園寺侯爵閣下にまでご迷惑をかけるような雲行きになっているんだそうですよ」

「ほほう」

奥まった大きな机で答えたのは、本店支配人の伊庭貞剛であった。いつもの質素な羽織はかま姿で、色白で小ぶとりに太っている。これまたいつもの習慣の通り、ややゆっくりした、静かな落着いた調子で答える。豊島の持って来た情報は初耳なのか、それともとっくに知っているのか、別に驚いている風はない。目は机に開かれているノートから離れない。

「伊予の政治家で……今度は藤田達芳という人だそうですが……東京であなたのご懇意な品川弥二郎閣下などの門を叩いて、調停をお願いしたいからぜひ西園寺閣下に会わせてくれと頼んでいるんだそうですよ」

「ふーん」

伊庭の声は、全く熱意がないかのように聞こえた。豊島がいっている西園寺閣下とは、のちに総理大臣、元老となる西園寺公望で、当時は賞勲局総裁であった。広い机には、開いているノートと同型のノートが、何冊もうず高く積まれている。

「あすにも清国と戦争が始まろうかというこの重大なご時勢にですよ、しかも貿易の上でも軍備の上でも絶対に欠くことの出来ない別子銅山の銅の製錬をですよ、わずかの煙の害くらいをいい立てて、百姓が何百人も蓆旗を立てて、やめろやめろと製錬所に押しかけることはないですよ。その上に、いかに家長公のご令兄とはいいながら、国務ご多端の西園寺閣下までわずらわせるとは……恐れ多くて……」

「なるほど——」

豊島の昂奮は、いっこう伊庭には通じないかのようであった。家長公というのは住友家の当主への雇い人たちの呼び名で、このころの住友の事業はまだ住友家の個人経営だったから、普通なら『旦那さま』と呼ぶほどのところを、二百何十年の歴史が重々しく『家長公』などとい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わせているのであった。
その若い家長の吉左衛門友純は徳大寺侯爵家からの婿養子で、同じく西園寺家へ養子に出た公望の実弟に当たる。住友家では番頭政治が行なわれていて、家長はいわば実務には殆どタッチしない『会長』のようであり、事実上の社長は、当時の職制では『総理人』と呼ばれ、幕末維新の動乱で大阪の豪商たちが片っぱしから潰れていった中で、住友家と別子銅山を守り抜いて『不世出の英傑』と謳われたワンマン・広瀬宰平であった。支配人の伊庭はさしずめ専務で、理事の豊島たちは取締役に当たる。
「何をお調べですか？」
あまりの手応えのなさに、豊島は話題を変えた。ちなみに断わっておくが、このような会話は本当は大阪弁で行なわれたのを、読み易くするために標準語に直したものではない。住友では明治のこのころから、幹部たちの会話は殆ど標準語で行なわれていたのである。
「足尾騒動の新聞記事だよ」
始めて返事らしい返事をして、右手でノートをさし出して貼ってある切抜きを見せてから、伊庭は立ち上がって横にある来客用の安楽椅子に来て、ゆっくりと掛けた。
「何をのんきなことを！」
若い重役で誠実一本の豊島は、思わずなじる声になって、いった。
「足もとに火が付いて……大事な別子銅山がいまにも潰れようかという騒ぎになっていますのに……よその騒動なんかどうだっていいじゃないですか」
いかにもそうである、といえただろう。別子銅山は元禄三年（一六九〇年）に発見され翌四

年に開坑された日本でも最古の大銅山の一つで、すでに四年前の明治二十三年には開坑二百年記念祝典が現地と大阪で盛大に行なわれている。また十年余り前の明治十五年に制定された『住友家法』の第一款である『家憲』にも、「予州別子山ノ鉱業ハ万世不朽ノ財本ニシテ、斯業ノ盛衰ハ我一家ノ興廃ニ関シ重且大ナル他ニ比スベキモノナシ」云々と謳われている。

その別子銅山で採掘した銅鉱石は、二百年近いあいだ遠く人里を離れた四国山脈の別子山中で製錬されたのだが、明治十年代このかた次第に下界に降りて、かつては瀬戸内海ぞいの小さな漁村であった愛媛県新居郡新居浜村字惣開の工場で製錬されるようになったのである。

そして、その必然の結果のように、新居浜村を中心とした近村に、溶鉱炉による亜硫酸ガス公害が発生し始めたのである。それは明治二十年ごろからのことであった。

それまでにも、銅山の害毒が地方民とのあいだに紛糾を起こしたことは、旧幕時代から度々あった。しかしそれは、鉱毒水が暴風雨の時などに流れ出て、南は銅山川から吉野川へと徳島県側を、北は国領川に溢れて新居浜平野をと、田畑を汚染して農作物を損なうという点についてであった。

幕府時代には、銅は長崎で貿易の決済に使われ、多い時には日本からの全輸出金額の七割をも占めた。極めて重要な物産だから、そんな時には幕府や藩は農民に租税を負けてやる政策を講じたり、また鉱山側が賠償金を払ったりして、その都度の解決をして来た。

しかし、新しい公害である煙害は、全く性質の違うものであった。旧幕時代には製錬施設はすべて千何百メートルもの山上の谷間にあって、煙の害といっても周囲の山々の木々を枯らすだけであった。治山治水の上では、それはそれで重大問題であるとはいっても、直接に地域住民の健康や、また農作物を害するものではなかった。

ところが明治十六年に惣開に小さな試験的な洋式溶鉱炉が建設されて以来、その成績が従来の和式のものより格段にいいので、続いて実用的な中高炉、大高炉が建てられた。それから煙の害がいわれるようになったのだが、地域が局限されている上に、そのあたりには住友の所有地の小作人が多かったので、訴えて出れば住友は気前よく幾らでも年貢を負けてくれた。ないし全免してくれた。だから余り大きな騒ぎにはならなかったのであった。

ところが惣開の工場の好成績に気をよくした住友では、二十一年には新居浜村の南郊——四国山脈の山裾にあたる角野村山根にも別に製錬所を建設し、また二十三年には、山根よりはかなり山頂によった立川というところで行なわれていた和式の精製工場をも廃止して、これを惣開の工場街に吸収した。こうして惣開は洋式の溶鉱炉五座を始め和式洋式の各種の製錬施設数十座を擁する大製錬基地となり、地名さえ『溶鉱炉』と俗称されるようになっている。

（そして……あの小さな汽車が……すべてを一変させたのだ！）

伊庭は思うのであった。豊島の憤懣の声は、本当は伊庭には痛いのであった。というよりは、伊庭も心の中では豊島と同じ思いなのであった。しかし伊庭は、悠々とした態度は変えなかった。

伊庭の考える小さな汽車とは——別子銅山と新居浜を結ぶ下部鉄道と上部鉄道という二つの鉱石運搬用の軌道であって、前者は昨年（二十六年）の五月に、後者は同十二月に開通したのである。そして、下部鉄道が開通したことだけによっても、鉱石の輸送量は飛躍的に増加して、惣開の煙突はその初夏から革命的に大量の亜硫酸ガスを吐くようになった。

果たして麦の作柄は悪く、苗代は枯れようとした。稲の育ちも、絶望的な悪さであった。それまでは局地的な苦情だったのが、今度は近在数ヵ村の全体的な騒ぎとなった。農民代表は九

月になって県に訴えたが、県の技師たちによる実査の結果が「煙害ではなく一種の虫害であろう」と中間発表されて、一そう激昂した。

九月の末になると、稲作の見通しとともに騒ぎは暴動化し、農民たちは連日、惣開にある住友分店に押しかけた。二十五日から二十八日にかけて、始めは数十人だった農民の数は連日百人、二百人とエスカレートし、ついに十月八日午後二時過ぎには、猛り立った数百人の農民が分店を取り囲んだのである。

「溶鉱炉をぶちこわせ！」

「重役の家を焼いてしまえ！」

「あいつら鉱山へ逃げるぞッ。汽車を停めてしまえ！」

汽車とは、鉱山から溶鉱炉へ鉱石を運んでくる例の下部鉄道のことである。群衆の一部はついに分店事務所の門をこわして押し入り、警備の警官と部分的な乱闘がくり返された。

その騒ぎは結局は警官隊に鎮圧され、やがて県知事の斡旋で一応静まったが、上部鉄道も開通し、製錬量はその後も殖え続けて、煙突は煙を吐くことをやめたわけでない。

今年も春風が吹き始めれば——不吉な予想に悩むのは、伊庭とて豊島に劣るわけがない。だが、伊庭はそのことを口には出さない。

「君は——田中正造という人を知っているね」

安楽椅子に掛けた伊庭は、気楽そうな声でいって豊島を見上げた。

「はア、それはもちろん——」

豊島はなおも頬をふくらませている。

「わたしは第一回国会で田中さんと議員仲間だったが……君は足尾であれほど激越な鉱毒闘争をしている田中正造という人を、どんな人物だと思っているかね？」
「ハ――？」
意外な質問に、豊島が驚いて見直した伊庭の表情は、豊島の気のせいか意外にきびしいものであった。
「あれを読んでみたまえ」
伊庭が振り向いて目で示したのは、自分の机にうず高く積まれたノートであった。豊島は立ち上ってそのノートを取って来て、伊庭の前に掛けた。
「これは……まるで田中議員の、足尾糾弾の演説集みたいですね」
ノートはすべて、切抜き帳になっていて、その切抜きには一つ一つ丁寧な筆で年月日と掲載紙・誌名が朱書されていた。紛争現地の下野新聞や、東京の新聞や雑誌のが多く、大阪毎日新聞や大阪朝日新聞のもあった。豊島は不承々々にページを追った。
が、その足尾鉱害と鉱毒闘争の記事は、豊島が熟知している新居浜の煙害騒ぎよりも、遙かに苛烈な内容のものであった。
「これは……これはひどいですねえ」
豊島の不満げな表情は間もなく消えて、目が輝き、豊島は唇を強く結んで切抜き帳を読み耽り始めた。
その内容を、ごく簡略にとりまとめると次ぎの如きものであった。
――足尾鉱山は関東の北部、栃木県西部の足尾山地にある銅山で、慶長十五年（一六一〇年）に発見された古い鉱山である。幕府直轄鉱山として江戸中期の初めごろ殷盛をきわめたが、次

第に衰えて、江戸末期には廃鉱同然となった。明治に入って新政府に接収されてからも事態は変らず、ついに明治四年、民間に払い下げられ、転々ののち同十年、新興の政商である古河市兵衛の手に渡った。

古河のきわめて熱心な経営努力によって、足尾は息を吹き返した。辛苦のすえに新しい富鉱脈が次ぎ次ぎに発見され、坑内軌道の敷設、坑水排除用の手押ポンプや削岩機の採用などと、設備や技術の革新が進み、さらに水力発電所の建設による鉱石の鋼索輸送、新型溶鉱炉の建設などと、一そう本格的で大規模な近代化が続いた。

その結果、産銅額は急速に伸びて、ついに一昨々年の明治二十四年には年産千五百万斤（九千トン）を越えて、全国銅山の首位を誇るに至り、別子と並んでまさにわが国銅鉱山中の双璧となった。

が、その発展、飛躍には、早くから陰惨な影がつきまとった。鉱山から流れ出る銅やその他の重金属類を含んだ坑水が、下流の渡良瀬（わたらせ）川の水質や沿岸の田畑を汚染して、早くも明治十四年ごろから魚類の死滅、農作の不振となって地元の怨みを買った。

地元民の反対運動は、二十三年の栃木県足利郡吾妻村の臨時村会の決議による『製銅所採掘の停止』の知事への上申書提出を皮切りに、同年末の栃木県会では同様の要望が満場一致で可決され、さらに二十四年十二月の第二回帝国議会では、田中正造議員の鉱毒停止の質問演説が行なわれて、ついに全国的な政治問題にまで発展したのである。

伊庭の机の上の何冊かの切抜き帳は、それらの鉱毒問題自体や、また政治的な動きや大衆運動の刻明な跡づけなのであった。

「しかし……これは少しひどすぎますよ。いいですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com